

第1回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会 要旨

内 容	第1回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会
日 時	平成30年8月14日（火）14：00～16：30
出席者	○懇談会メンバー：（五十音順） 五島朋子、坂手洋二、笹井裕子、津村卓、長谷川誠、平井優子、柗木和敬、八木景子 ○コーディネーター：草加叔也

懇 談 会 次 第

1 開会

- (1) 開会挨拶
- (2) 事業の概要説明
- (3) 懇談会メンバー紹介・あいさつ

「岡山芸術創造劇場（仮称）」に期待すること」

2 議事・意見交換

- (1) 検討懇談会の進め方について
- (2) 管理運営実施計画目次（案）
- (3) 意見交換・検討

3 閉会

- (1) 次回の開催予定について

発 言 要 旨

1 開会

事務局（進行）：

第1回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会を開会する。

荒島市民生活局長：

検討懇談会の開会挨拶

佐藤文化振興課長：

岡山芸術創造劇場（仮称）整備事業の概要説明

コーディネーター：

懇談会メンバーの紹介にあわせて、「岡山芸術創造劇場（仮称）」に期待すること」に対するコメントをお願いする。

五島：

アートマネジメントを専門にしている。劇場が地域づくりにどのように役に立つか、研究あるいは実践している。岡山に劇場ができると鳥取からも大勢が足を運ぶと思う。積極的に議論に参加していきたい。

坂手：

劇作家・演出家として活動している。岡山出身であり、岡山市民会館には子どもの頃より親しんでいた。岡山市に創造型の新しい劇場ができることを期待している。海外等の事例も参考にしながら、岡山独自のホールを検討していきたい。

笹井：

ぴあ総研にて、文化芸術を含む日本全国のライブ・エンタテインメントがどれくらい行われていて、どれくらいの市場規模があるのかを研究している。私も岡山市出身なので、もっといろいろなライブ・エンタテインメントが供給され、市民が楽しめたらいいと思う。産業面、全国的なトレンドや票券管理などの立場から、お手伝いができればと思う。

津村：

劇場に関わる仕事を行って 35 年になる。市民・県民・国民の財産であり、世界の人たちの共有財である劇場を、新しく建設するにあたり、出来る限りのことを頑張らせていただきたい。

長谷川：

岡山のまちなかで生まれてまちなかで育った。東京、大阪へといたが岡山に戻り 35 年経った。今は色々な縁で表町商店街の理事長を務めている。

このたび、千日前に新劇場が建設される。私たちはこれがゴールではなく、むしろ出発であると考え、劇場のオープンに向けて、様々なプロジェクトチームを発足させ、すでに活動を始めている。

劇場が地域を巻き込んだ動きがどうなるか楽しみにしている。オープンに向けて、またオープン後にも地域を巻き込んでいろんなことをやっていけたらと思う。

平井：

岡山生まれ岡山育ちで、いまはコンテンポラリーダンスのダンサーや振り付け活動している。劇場では演じる側、創る側として、制作や国内外の劇場と関わる仕事をしている。

今までの自分の経験で印象に残った劇場などを参考にしながら、岡山に親しみやすい劇場ができたら良いと思う。

証木：

近年、オペラ業界でも岡山出身で、ヨーロッパで活躍している歌手は多い。最近、中四国の広域で公演を企画するという考えがでてきているが、まさに岡山の地理、アクセスは中四国の中心となりうる場所だと思う。ヨーロッパの劇場のあり方なども参考にしながらご意見できたらと思う。

八木：

生まれも育ちも岡山だが、高校卒業以降は東京で役者として活動していた。12 年ほど前に岡山に戻り、今は地方局発信のドラマや、映画出演、舞台の主宰、演技講師等を行っている。

12 年前、岡山に戻った時に、地域の芸術文化の活性化に少しでも貢献したいという思いで、Terra 岡山芸術会という、次世代に繋がるような企画を運営して進めていく会を立ち上げた。岡山を元気にしたいという思いで活動しているので、作り手・利用者の面から役に立てたらと思う。

岡山にも優れたアーティスト・作り手がたくさんいる。新しい劇場はそういった方々がより自由な発想で創造できる場や、地域の方に「地方でも面白いものができるな」と思ってもらえるような場所であり、それによって商店街や岡山市がより活性化していったら良いと思う。

コーディネーター：

本日、都合が合わず欠席されているが、NPO法人ハートアートリンク代表の田野智子さんと（公財）京都市音楽芸術文化振興財団ロームシアター京都管理課長をされている宮崎刀史紀さんにも委員を務めていただく。

2 議事・意見交換

コーディネーター：

本日懇談会は、お手元の資料をもとに進めていきます。

資料 1 検討懇談会の進め方について

資料 2 管理運営実施計画目次（案） を説明の後、個別資料に基づき意見交換を進行

【事業想定案、事業計画のイメージ案などの短期的な事業計画について】

津村：

市内には岡山シンフォニーホールがあるので、新たなホールは舞台芸術がメインになるだろう。「劇場」と銘打って開館する館としては、特に中ホールの演劇・ダンス公演が少なすぎる。自主事業が年に1本か2本になっているが、北九州芸術劇場では、中劇場だけで年間20作品以上公演している。

以前も申し上げたが、いま人気のある芝居のツアー公演は、東京の後は大阪の民間ホールか兵庫県芸術文化センターで公演を行い、その次は岡山を飛ばして北九州芸術劇場へと行く。そのような状況の中、岡山に新たな劇場ができるという意味では、チャンスはいくらでもある。北九州、兵庫へと公演を観に行く岡山の方は多い。そこをきちんと受け入れていくことを、劇場として考えないとならない。

これから先、この国の財産になって行くもの、ダンス・アート、アーティスト等を受け入れていかねば、「劇場というものは一体何なのか」と言われる状況になる。

コーディネーター：

芸術創造劇場を名乗る以上は、その大義を見せなさいというご指摘だと思う。ここに示しているのは短期的な事業計画であり、まずはこのあたりからスタートして行ってはどうか、と示したものだが不十分にご指摘をいただいた。

津村：

これでは不十分だと思う。ただし、（事業計画を立てるだけでなく）開館までにどれだけのプロセスが必要になるか、スタッフの育成も含めてしっかり計画して行かなければならない。

坂手：

劇場は、オープンして3年間で勝負になる、という言い方をする人がいます。3年間何もなかったところに、4・5年目にヒット作が出て大抵うまくいかない。劇場は人が創るものなので、「どういう形で、どういう想いでつくったか」というイメージを最初に持っていないと、イメージがないままで固まってしまう。地域の皆さんや全国のアーティストとの連携ができていないまま開館するとうまく行かない。

この劇場は「創造劇場」と銘打っているが、現在示されている事業モデルでは、「全国の劇場の中では少しは頑張っている」というだけに過ぎない。大ホールに市民会館的な側面があるのは理解しているが、自主制作や合同制作を含み、創造的な場所である中ホール・大スタジオ・大練習室に見合う制作的な事業がほぼないように見えます。「事業全体のうち何%を制作に充てる」といったことを議論していったほうが良い。

この中には「通年」と書かれているものがあるが、その事業はどこに向かっているのか、月1回を積み重ねて、どこに向かってどうしていけるのかというビジョンから考えたほうが良い。

私も岡山出身なので「岡山はすごいね」「他の地方でやっていないことをやっているね」「こんなの初めて見た」と言わせたい。そのためには頭をひねる必要がある。岡山の人間が、色んな人やものをあわせ一緒に創っていくことが「岡山の個性」というものになって行く。

今は、どういうビジョンがあるか分からない状態で事業想定をしているので、現行の全国公立劇場のいい

とこ取りをしよとしてしている。思い切った方針を出すためには、誰が責任を持って創造的な活動をして行くのかを明確にしたほうが良い。

例えば、東京都杉並区「座・高円寺」という劇場は、劇場建設時から劇作家協会が関わっている。劇作家協会と区がパートナーシップ協定を結び、なおかつ独自にアーティスト主導のNPO法人を立ち上げ、指定管理者となっている日本で唯一の劇場である。建設時に最低限求めたことは、創造型劇場であるために、稽古場や道具、衣裳などの製作場等を備えること、また、そのために、一般貸出をしない占有の場を持つとすることである。何度も区と話し合ったが、それを認めていただくことにより、初めてアーティストが主導する創造型劇場が東京にできることになった。

「座・高円寺」にはホールが2つあるが、1つは一般貸出をし、1つは通年で劇場がプログラムを組んでいる。最低限そのくらいの裁量がなければ、責任を持って創造的な事業はできない。

市が「岡山市は他とは違うことをする」とどこまで思っているか、それにかかっている。「創造劇場」を名乗る以上、覚悟を決めていただきたい。

五島：

この資料は「年間の事業計画」であり、「開館初年度の事業計画」ではない。事業数が少ないというご指摘があったが、ここに記載しているのは「施設の中」で行われる事業のみ。実際にはアウトリーチや、地域の商店街や学校と関わることも行っていこう。そういったことも示さないと、この劇場が外に向かって活動していくことが見えない。

また、事業の対象が「市民」「青少年」としか書かれていないが、「高齢者」「親子」「男性」「女性」など、対象の顔が見えるイメージがあっても良いかと思う。

【広報活動計画について】

笹井：

広報について網羅的に書かれているが、「誰に対して何を伝えたいのか」を明確にして行くと、分かりやすくなる。ぜひ、広報活動自体も創造的であって欲しい。

例えば、建設工事中の仮囲いに絵を描くなどの企画を行うなど、完成前の段階から参加ができ、わくわく感や期待感を持たせるような創造的なものであって欲しい。

津村：

「誰に対して」というご指摘があったが「誰が創るのか」「誰が演出していくのか」ということも重要。広報も一般的な市政だよりのような紙面では見ないし、響かない。初期の段階で立派なものを作る必要はないが、いかに手に取ってもらおうか。どうやって創造して行くかということ。

2019年、2020年あたりは、期待が膨らんで行くためには重要な年になるだろう。「誰が」ということを大切に進めていただきたい。

五島：

「誰が」というのは、すでにプロとして活動しているデザイナー・クリエイターに依頼するというものもあるが、アウトリーチの一貫として、例えば子どもや大学生など将来的に関わってもらいたい人たちと一緒に新聞等を作っていくという方法もあるだろう。

平井：

劇場の愛称は一般公募しないのか。愛称があると親しみやすい。

コーディネーター：

愛称の一般公募は行う方法で検討を進めている。「岡山芸術創造劇場」は、あくまでも施設設置条例の正式名称であり、今後、愛称あるいはキャラクターみたいなものも考えるという話もある。もちろん支援をしてくれるところがあれば、ネーミングライツも可能性があるだろう。

長谷川：

周りの方々から、「本当に市民会館はできるの？」と聞かれるが、工事が始まっていないというのが大きいと思っている。千日前商店街は建替えを機にアーケードを全部取り外すこととなっている。アーケードを取り外して以降、どんな街にするかを早急に考えている。工事が進んで建物が見えてくると、周りも「いよいよかな」と感じられると思う。

アーケードを取り外すことに関してだが、アーケードは皆さんが思っている以上に維持管理経費が掛かる。アーケードの下は市道なので道路占用料を払わねばならない。電灯代や経年劣化による修繕費も掛かる。これらを地元の組合が負担しないとしない。かといって、千日前のみアーケードをつけるというわけにもいかない。先々のことを考えるとアーケードを取るという選択肢しかないというのが現状である。

ただし、雨や直射日光の対策はアーケード以外の方法で考えないとしないだろう。

坂手：

先日、高松に行った際に商店街のアーケードに感心した。岡山もアーケードは整備したほうが良いのではないか。市がアーケードを整備するというのも考える余地はないのか。

広報に関してだが、プレ事業についても考えねばならない。プレ事業は「どういう場所にしたいか」というビジョンを知らせたいためのアピールの意味を持つべきだが、確たるビジョンがないと、ただ施設ができるから広報をするだけになる。

例えば、「座・高円寺」もタブロイド版の広報誌を出している。いっけん、紙面の8割がまちの紹介で、劇場のことは残りの2割しか書いていない。しかし、視野の広い区民との関わりを提示していくことによって、本気で街と付き合うという信用を打ち出している。

岡山は「何を念頭に広報するか」というのが必要。私は「岡山の色」を持ちたいと思っている。いまの岡山は何もせずとも新幹線が停まり、自動車道からの流れもあるので鷹揚に構えている。しかし、本当はもう少し色を出したほうが良いと思う。そうすると、劇場だけのことではなく岡山のことになる。

新劇場の整備には様々な条件があるが、こうやって検討していることと、この条件との間をどう埋めて行くか。そういう意味でも早く方針を決めていただきたい。

【施設管理・運営計画：岡山芸術創造劇場 利用規則（案）について】

津村：

制作サイドから重要なことは、トラックの仕分けをきちんとできるように担保しておくこと。同じ時間帯に11tトラックが「大ホールは7台、中ホールは3台」など集中した時にも、きちんと捌けないとしない。搬入がきちんとできないと、時間がいくらあっても仕込み・バラシができなくなるので、しっかり担保していただきたい。

中小練習室についてよくあるのが、「10部屋あります」と言いながら、ほとんどが中途半端な大きさと、演劇やダンスには狭く、音楽には広いという、何を目的に練習室を作ったか分からない施設。使用目的を明確にした状態の練習室ならば、数がたくさんあるというのは重要である。ただし、管理者側は、数が多くなればなるほど大変になる。

オープンロビーについて、これも1,750席、800席、200席という全てのホールの開演時間が一緒の時のことも考えていただきたい。劇場は、大勢の人を捌くことを考えるとともに、何もやっていなくても人が集って、楽しい空間にならないといけないという、相反すること実現させねばならない。

管理事務室について。例えば事業制作を担当した場合、行き来をする場所が少し離れているだけで、スタッフは劇場内を一日に2万歩以上歩くことになる。また、管理をするためには目が届いていなければならない。そうしないと事故が起こる。

スタッフの部屋は、施設計画のなかで一番後回しにされるという昔からの風潮がある。しかし、劇場スタッフは360日12時間をそこで過ごさなければならない。一番重要とは言わないが、楽屋とかと同じように、窓があって天気や時間、四季が分かるような部屋を整備していただきたい。

利用ルールについてだが、「大ホールは18か月前から受付け、中ホールは13ヶ月前から受付け」というルールの根拠が不明。「自主事業や必ずやりたい演目を含め、劇場をどう動かしていきたいか」ということ

から、「内部的には何ヶ月前からの受付だと良いのか」ということを考えていっても良いだろう。

割増入場料金については、あまり細かく区切らずに「5,000 円以下、5,000 円以上」という大胆なやり方にして、自由度を主催者に渡したほうが良いのではないかと。今はある程度の演目であれば 5,000 円以上するものが多い。

また、文化芸術利用とその他利用については、「文化芸術利用」とは何をもって「文化芸術利用」とするのか。せめて「舞台芸術利用」にできないか。そうすると利用目的によつての扱いの差が明確になるのではないかと。

坂手：

津村さんの指摘した「文化芸術利用」ではなく「舞台芸術利用」にする、ということは重要。

ただの講演会やシンポジウムのためだけに、専門的な舞台芸術の設備を備えた施設を使うのは勿体ないということもある。この施設が「舞台芸術に特化した創造劇場」であるということをも市民の皆さまに理解を深めていただかなければならない。

中小練習室が 10 室以上とおっしゃっていますが、「座・高円寺」の例で言うとそれが二つのフロアに分かれる。一つのフロアは劇場が主導する創造型に特化し、一般には貸出さないということまでやりこまないと、創造型の劇場にならないだろう。

休館日に関しては、ほぼ休まず、合理的に休館日を作ることで稼働率を上げ収入を上げる。休館日がないことで、労務管理上の課題はあるかもしれないが、創造型の劇場を名乗るのであれば、深夜作業や休みがない期間ということが発生することも考えられる。そういったことに特例で対応するのではなく、最初から少し緩やかにしていただきたい。

入場料に関しては、5,000 円はある程度高いと思う。「座・高円寺」は、全ての演目の入場料は 5,000 円を上限にした。そのため、5,000 円以上のチケット料金をとりたい団体は他のホールを利用している。そういったことでも劇場の色や個性を出していい。ただ、それは岡山にあてはまるとは思われない。

先程プログラムを「誰が」決めるのかという指摘があったが、「座・高円寺」の場合は、劇作家協会と杉並区が提携しており、年間 18 週は劇作家協会のプログラムとして、劇作家協会内で協議してプログラムを決定する。劇作家協会は責任をもって、劇場・杉並区に対して質を担保していかねばならない。互いに良い緊張があるなかでクオリティを高めて行くことができている。

岡山は、「こういうことを全国で初めてやった」という岡山型であり、かつ岡山だけに閉じないというやり方をして欲しい。「こういうことは岡山じゃないとできない」と言われる劇場になって欲しい。

コーディネーター：

休館日の設定については、隔週 1 回程度などの可能性も考えていきたい。

【岡山芸術創造劇場 施設使用料の考え方について】

コーディネーター：

現状の利用料金と比較すると若干高くなるのはご理解いただけると思うが、どの程度が妥当なのか更に検討していく必要がある。利用料金が安くするという事は、(劇場を利用しない市民を含め) 広く岡山市民が負担するということになる。

五島：

利用料金の想定について、施設規模や都市別に平均値を算出している。しかし、パターン 1、パターン 2 の岡山市内、岡山県内の施設の平均値は、これまで岡山に創造型を掲げた施設はなかったため、現施設の数値と比較しても、あまり意味がない。また、古い施設も多い。

パターン 3 についても同様に、四国・中国地方に施設がなかったためあまり意味がない。比較をするならば全国先進施設の中で、芸術創造機能を担い、コンセプト・ビジョンを持った運営をしている施設と比較するのが順当だろう。パターン 4 も様々な規模の施設が含まれているが、岡山市がこれから目指そうとしている規模や事業と同様の活動をしている施設を参考にすると比較材料としてはパターン 4 程度になるだろう。

八木：

これまでとは異なる目的をもった劇場を造るという意味では、パターン4に近い設定でも良いのではないかと。利用者側は施設の使い勝手から利用する施設を選ぶ。これまでとは違うメリットがしっかりとあるのなら、使用者側としてはパターン4に近い数値でも良いだろう。

コーディネーター：

利用規則、利用料金の話は、創造型の劇場として新劇場を活用する考え方とは若干ずれていることかもしれない。劇場側が、主体的に事業を行うのが創造事業であり、今、検討しているのは広く市民の皆さんに使ってもらうための妥当性の検討である。

坂手：

「座・高円寺」の場合は、運営ルールそのものがかなり特殊です。「座・高円寺」には、ホール1とホール2の2つのホールがあるが、ホール2は一般貸出を行っている。ホール1は基本的に一般貸出を行っておらず、年間18週、劇作家協会にのみ貸出している。利用料金も非常に安価な設定になっている。また、劇場の意思として行って欲しい公演を他団体と提携公演として行う場合も、専用の料金設定がある。

津村：

パターン4の料金は、全国的な傾向や、新劇場のスペック、スタッフの力量等を考慮すると決して高くはない。きちんと施設設備の整った劇場で公演を行うと持ち込み機材等の費用が軽減できるため、利用者側に技術と頭脳があれば、確実に全体の制作費は落ちる。

利用料金は設置条例で定められるとなかなか変更できない。将来を考え、受益者負担ということも考えなければ、指定管理者での利用料金制を導入した場合、管理運営が維持できなくなってしまうというリスクの方が大きい。料金設定をパターン4以下にすると、後々苦しむことになる。

【市民の参加や協力について】

コーディネーター：

地域との連携について、既に進んでいる「表町商店街活性化プロジェクト」がどんなことを考えており、劇場側がどんなことをやっていけるかをお伺いしたい。

長谷川：

新劇場の開館を「岡山の魅力はなんだろう」と考えていく大きなきっかけにしていかなければならないということで複数のプロジェクトを進めている。

(商店街で行われているプロジェクトの説明)

- ・オランダおイネ記念館創設プロジェクト
- ・鐘撞堂再建プロジェクト
- ・空き店舗対策プロジェクト
- ・千日前整備プロジェクト
- ・魅力創出プロジェクト など

コーディネーター：

商店街で様々な事業を考えられているので、これから接点をどう作っていくか。北九州芸術劇場での、商店街と一緒にいった事業をご紹介いただきたい。

津村：

(北九州芸術劇場で行われたプロジェクトの紹介：京町商店街との連携プログラム)

商店街のプロジェクトについては、期間を3年間と区切りスタートした。

北九州芸術劇場では、劇場のオープンと同時に連携プロジェクトを行うということではなかった。やはり

劇場が周知されていないと成立しない。お互いの信頼関係を構築した上で、そういったプロジェクトをスタートさせた。

コーディネーター：

海外での劇場と地域との接点についてお伺いしたい。

証木：

私が公演で行っているのはイタリア、ドイツなどが多い。ヨーロッパのまちの劇場と言えばオペラハウスであり、劇場と密接な施設としては飲食関係である。劇場はまちの中心にあるので飲食店は劇場のスケジュールに合わせて開いている。例えば、スカラ座は「今日の演目は長くないから 22 時に終わる、その後お客さんが来るから 24 時まで開けよう」「今日の公演は 24 時までである、じゃあ朝まで開けようか」など、オペラの終演時間にあわせて営業時間を変えるくらいの柔軟な対応をする。表町も移動店舗でのイベントや、夏祭り・秋祭りなどでも人は集まる。ヨーロッパはそういった素朴な物が多い。

コーディネーター：

夜の岡山の過ごし方、ナイトライフが少し変わっていくきっかけにもなっていければ良いと思う。特に、最近の都市型施設ではインバウンド需要が考えられている。旅行客を受け入れられる経営ということ、またそれをどうまちに返すかもポイントになる。

証木：

失礼ながら、新劇場の建設予定地には、今は人の流れがない。それをつくる起爆剤になるべき施設でもある。劇場を使う人が一番通うことになるので、使う側との関わりも大事だと思う。

コーディネーター：

城崎国際アートセンターでも劇場と温泉が連携したプログラムを行っている。アーティストから見てどうかお伺いしたい。

平井：

城崎国際アートセンターは劇場というよりも滞在制作をメインにしている。オープンして 4 年目になるが、行くたびにまちの人の受け入れ方が変わってきている。

(城崎国際アートセンターでの取組事例紹介：滞在者、制作者パスでの温泉利用 など)

創造劇場がものを創ることに特化するのならば、滞在型ということも考えると良い。アーティスト側からすると、作品を創作している間は滞在することになるので、些細なことが重要となる。城崎国際アートセンターは、24 時間利用できるということもとても助かっている。

坂手：

金沢市民芸術村も 24 時間利用できる。基本的に市民が管理している施設であり、朝方などにも利用されている。

城崎の場合は、温泉があるという魅力は非常に大きい。まち自体に魅力があると強みが倍化される。私も岡山市で育った人間としては、なんとか岡山の個性を打ちだして、「岡山っていいね」と言わせたい。そういう意味で、城崎の例は、魅力がいっぱいある。

子どもたちや学校も含め、地域ぐるみで取り組んでいくということは重要だと思う。特に劇場は、子供達のものでもある。劇場は公的な開かれた場所として、魅力のある場所で、子供達にどう開いていくか。

「座・高円寺」では、杉並在住の小学校 4 年生全員が、年 1 度「座・高円寺」で演劇を鑑賞する。この取組みも高い評価を得ている。他にも、子どもに特化した取組を何十種類も行っている。

劇場があることによって、人々が「あそこで何かをやっている」「自分もやっても良いのだ」と思えるようなことを考えていくと良い。

津村：

「城崎国際アートセンター」や「座・高円寺」をモデルにすると、誤解が生まれる可能性がある。

それぞれの取り組みを否定しているわけではなく、また取り組むべきとは思っているが、岡山市のあの場所で城崎型のアーティスト・イン・レジデンスは絶対にできない。また、「座・高円寺」のように、岡山市全域の小学生を全員集めるのは不可能である。

取り組まねばならないことだが、良い事例だけをお手本にし、本来劇場がやらなければならないことを手放してしまうと、劇場本来の活動ができなくなってしまうことにもなりかねない。

コーディネーター：

岡山市という政令指定都市の千日前商店街という場所に新しい劇場をつくった時に、何を選択するのが一番良いのかということ整理し、優先順位を決めて進めていかないと3年程度で破綻してしまいます。

「全国での成功事例を模倣すれば良い」という誤解を生んではならない。できること、できないことの仕分けが重要ということです。

最後に、各メンバーから本日の意見交換全体を通して気になる点を一言お願いします。

五島：

「地域との協働」という話のなかで、私は「鳥の劇場」の事例を考えました。「鳥の劇場」というNPO法人は鳥取で活動をはじめ12年程度になるが、年に1回国際演劇祭を行っている。2～3週間程度の期間で外国人を含め約3,000人を集客している。

しかし、国際演劇祭には来るが、街を見ずに帰るといったことが起こってしまうこともあった。そこで、「空き家や空き店舗をいきなり借りるのは難しいが、空いている軒先だけ貸してください」ということで、全県的に出店を募り、雑貨・パン・食べ物などを売るフリーマーケットのようなものを開催した。今年は約100店舗が出店し、お互いのメリットになっている。少しずつ積み重ねることで、そういった関係ができるかもしれない。

坂手：

何か思い切ったことを成功させるには、例えば、良い偶然が三つくらいないとできない。

杉並の場合も、キーパーソンとなる人物がいたこと、区が教育に力を入れるという下地があったこと、劇作家協会が杉並区の小学校で子どもたちに演劇を教えるという取組を何年か継続しており信頼関係が構築されていた、などの要素があった。でないと小学四年生全員に見せるという離れ業はできない。

同じことを岡山でやるべきだということではない。岡山には、岡山の独自性がある。その独自性を探していく中で、何ができるかという選択肢が出てくる。

キーパーソンと環境と場所が必要になるが、人が多ければ良いというわけでもない。「岡山型」を探すことが重要である。一つのことを一つの場所できちんと成功させていくということで見せて行くためには、岡山ことをいろいろ知っている人じゃないと難しい。

例えば、岡山の街の意思として、街を動かし再生させたいのか、もっと別なイメージを持っているのか。そのようなことの全てが関係してくる。「岡山のまちづくり」という大きな中で、市民会館や新劇場のことを含めたイメージを持たないと解決しないし、選択肢も見つからないだろう。

笹井：

改めて「創造」とは何を創っていけば良いのかを考えさせられた。市内には長谷川さんが話して下さった商店街での様々なプロジェクトなど、市民の皆さんと一緒に作ってきた種が溢れている。そこをうまく汲んで、一緒に劇場を創っていければと思う。

また、創造型の劇場を支えられる収入を得ることや、効率的な貸出しを行っていくことも求められる。今後、理想と、それを支えるための現実をしっかりと考えて行く必要がある。

津村：

劇場は、方向性をもった活動をしながらか成熟していく。皆さんが劇場を認知し、「こういうことやってくれませんか」と言ってくるまでには3年～5年の期間がかかる。オープン前からどう成熟度と方向性を見つけて進められるか。そういった計画も、もう少し時間が経ったら作ったほうが良い。

長谷川：

「千日前に劇場ができる」と周知されて以降、それに期待した新しいタイプの店舗も、商店街の中に少しずつできている。岡山らしい文化発信ができるという期待感も出てきている。これからも商店街に新しい動きが起こって行くだろう。千載一遇のチャンスである新しい創造劇場の完成に向けて、今から何ができるか、皆さんのお話を聞きながら勉強していきたい。

平井：

岡山で思うことは、いつも特定の観客しか来ないということである。だが、それは地域性だけでなく、作る側にも責任があるし、劇場の取り組みも関係している。

「これからの観客を育てて行く」という話もあったが、「劇場は楽しい場所だ」ということを幼い頃から体感してもらえる場所になったら良いと思う。また、アーカイブなども充実させて欲しい。

柁木：

東京の劇場でも、オペラ企画を独自に行っている劇場はほぼ無い。「オペラ公演ができるというのは、ホールの格の問題だ」と言う人もいる。

新しい劇場でオペラ公演が行えれば、西日本全体で話題になるだろう。市民参加をしたり、アカデミーを作ったり、学校公募を行ったり、音楽専科のある高校と連携したりなど、オペラを軸とした企画もできる。岡山市民がたくさん関わるとするのも「岡山らしさ」でもあると思う。

前にも申し上げたが、文化団体は横の繋がりが無い。また市内には企画力のあるホールが複数あるが、そのホール同士もアウトリーチ、アカデミーなど独自の展開をしている。そういったことと、横の繋がりをづくりだしていけるような劇場であることを期待する。

八木：

単に劇場ができるからではなく、岡山の人が協力して街をつくって行く、その中心に劇場があると思う。多くの方に協力してもらうためにはどうしたら良いか？何が求められているのかを考えて行きたい。

私も、横の繋がりが無いことは感じている。劇場がただ大きな公演をするだけでなく、観る側も育てていき、劇場の活動によって豊かな生活が送れるような企画ができれば良いと思った。

コーディネーター：

短い時間でたくさんの方の資料を見ていただきご理解いただきながら、さらに望ましい答えを探すというのは短時間ではなかなか難しい。懇談会の積み重ねることで、全体の管理運営を考えていきたい。

3 閉会

事務局（進行）：

第1回「岡山芸術創造劇場（仮称）」管理運営実施計画検討懇談会を閉会する。

以上